

第2回福井県行財政改革推進懇談会 概要

- 1 開催日時 平成27年10月26日(月) 15時30分から17時00分まで
- 2 開催場所 県庁7階 特別会議室
- 3 出席委員 窪田春美委員、小林広幸委員、白崎弘康委員、鈴木綾子委員、寺岡英男委員、藤原秀美委員、丸屋豊二郎委員(座長)、安久彰委員、山田照幸委員、吉田雅世委員(50音順)
- 4 事務局 東村総務部長、松田総務部企画幹、杉本人事企画課長、中尾財務企画課長、戸田人事企画課参事(行政改革)、大石財務企画課長補佐

5 議事次第

- (1) 開会
- (2) 協議事項
 - 1 市町、民間、大学等との連携について
 - 2 現場機能の強化について
- (3) 閉会

6 協議概要

(1) 市町、民間、大学等との連携について

(委員)

福井県繊維物工業組合が大阪大学の川崎和男教授の協力を得て、HABUTAEプロジェクトを立ち上げた。川崎教授からは、福井は繊維の産地であるが、福井大学に繊維学科がないので要望すべきと言われている。国内で繊維学部があるのは信州大学くらいである。

繊維は、以前は衣食住など身近なものに関わるものだけだったが、現在では航空産業や車の素材などの最先端の分野で実用化されるなど、用途が広がっている。

(委員)

繊維はイノベーションを生み出す可能性がある。北陸3県では、北陸産業競争力協議会において、高機能素材クラスター、ライフサイエンスクラスターに重点的に取り組んでいる。大学や企業等が連携して、どう進めていくかが重要である。

(委員)

人口減少社会の中で大学生を県内に引き止めるにはどうしたらよいか考えなければならない。若手社員に聞くと、県内大学には、希望する学部・学科がなかったということである。特に、福井県には理学部、薬学部、歯学部、法学部、文学部がない。これらを学べる学科もしくはカリキュラムがあれば、県内に留まるのではないか。

(委員)

先日、大学連携センターの概要を説明してもらったが、内容は地元の学生を主な対象

としているようである。

県内に戻ってきてもらう仕掛けが重要だと考える。県内大学の県内出身者の8割は県内に就職すると聞いた。今後は、県外からの就職を増やすために、帰省時期に合わせて夏季講座を開催し、講座を受けた県外学生は県内企業が優先して採用するなどの工夫をすべきではないか。

(委員)

福井大学において、繊維は、建築と並んで実績がある。

繊維は用途が広がり総合的な産業になってきている。福井大学においても、来春から、現行の工学部8学科から5学科に再編する予定であり、学科内に繊維に関する新しい教育コースを設置する。繊維については、信州大学を中心に京都工芸繊維大学と福井大学の3大学で連携を進めているところである。

また、文部科学省の平成27年度「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」において、福井大学が中心となって、県内5大学が参画した連携事業を行っていく。

大学連携センターにおいては、現在の県内大学生の県内就職率48%を平成31年度までに10ポイント高めることを一つの目標としている。具体的には自治体や企業との連携、県内大学間の単位の互換制度や高校との連携を進めていく。

(委員)

福井県は、幸福度日本一であり、学力体力が高い、失業率が低いなど良いことばかりであり、現状のままでもよいのではないかと思った。

このような現状の中で、県はどのような将来認識を持って政策をつくらうとしているのか。

(事務局)

国立社会保障・人口問題研究所の見通しによると、福井県の人口は2040年に63万人まで減少するが、これを68万人で留めようという計画を議論中である。

幸福度日本一であるのに、なぜ人口が減るのかという自問自答をしながら、幸福度日本一をいかに移住・定住につなげていくかという観点で、政策を投入していきたいと考えている。

また、東京の一極集中が課題であり、18歳で県外に出ることは昔から変わらないが、それでも地方に戻ってきていた。これが、22歳でさらに県外に出るという傾向が強まってきていることが課題である。

(委員)

私の子どもも大学進学時に、志望する学部が県内大学にないと言っていた。また、高校の先生も単に大学に受かるかどうかの基準だけで進路指導するのではいけない。進学したい学部をつくることも大切であるが、県内企業も炭素繊維などの将来性をPRしてはどうか。県工業技術センターに視察に行ったが、もう少し、工学系の生徒にPRできたらいいなと思った。県内出身学生の中には福井に戻りたくても、自分が大学で学んだことを活かせる企業がないと思い込んでいる学生もいる。

(委員)

県内の全ての大学に福祉学部が必要である。県外の福祉系の施設に就職した福井県出

身者の7割が体を壊して福井に戻ってくる職場環境である。今後の高齢化社会で重要な職種であるので、県、市町、企業が連携して、社会福祉の魅力などの情報を伝えていく必要がある。

(2) 現場機能の強化について

(委員)

資料中「地域資源を活かす施設を地元を設置」には、嶺南や若狭が入っていないが、県では何か対策を考えているのか。

(事務局)

施設に関して言えば、若狭歴史博物館をリニューアルした。来館者数も増加し、展示施設だけでなく、若狭の秘仏巡りなど若狭地方の観光の核・拠点と捉えて誘客に力を入れている。

(委員)

恐竜博物館などは東京でPRが行われているが、若狭地方に関してはそこまで行われているのかと思う。若狭地方をイメージさせるようなポスターも少ない。若狭にも目を向けて、PRを行ってほしい。

(事務局)

補足になるが、若狭は熊川宿、鯖街道が日本遺産に指定され、また、三方五湖の年縞は立命館大学と共同研究を行うこととなり、年縞の展示施設も検討中である。今後、北陸新幹線の若狭ルートが議論されており、今後とも、観光振興に取り組んでいきたい。

(委員)

北陸新幹線の波及効果を若狭にも波及させてもらいたい。小浜市では、今後、旭座を整備するが、芝居小屋だけでなく、その施設に来ないと見られないものを提供しないといけないと話合っている。県も支援してもらいたい。

(事務局)

旭座の整備については、観光の核になると考えており、市町振興プロジェクトにより、県と市で一体となって取り組んでいる。

(委員)

資料中「組織統合によるサービスの一元化」に関して、社会的に困っている方への支援は、時間と十分な対応が必要とされる。そうした中で、サービスの一本化や一元化は、窓口での実績や年間の件数で評価されることが多いが、そうした数字のみで評価するのは避けてもらいたい。それぞれに職員が頑張っており、数字に現れない部分も考慮して評価してもらいたい。

また、市町との連携については、支援を必要とする方が転居したり、キーパーソンとなる関係者も市町をまたがると、支援が漏れてしまうことがある。市町を横断する場合、支援が漏れないように、県がその分を見守るような支援の在り方が必要。また、支援を必要とする方は複雑な事情を抱えている場合もあり、様々な分野の専門職員で対応すべ

きこともある。

(委員)

福祉部門など県民に身近な部門を県から市町へ権限移譲することについては、県は調整や監督をしっかりとやってもらいたい。

(委員)

「公共施設」について、県立・市立という観点からみると、福井市内には県立図書館、市立図書館が合わせて4つあり、どの図書館も対象年齢が同じ読み聞かせを行っている。県がやっている事業、市でやっている事業はそれぞれで、エリアの違い、目線が違っていているなどのメリットがあるだろうが、事業が重複しているなどのデメリットもある。また、美術館についても、県立と市立があり、館蔵品を展示したり、県外等の施設から借りてきたりと、同様の事業を競い合っているが、同じエリアの中で競い合うことが適切なのかなのか。

(事務局)

図書館は、本に親しむ機会を増やす、美術館はそれぞれの文化に親しむもの。エリア的に同じような場合、それぞれの施設が競い合って、質を向上させていくことは否定するものではないが、同じような事業を同じエリアで行っていることについては、効果的に行っていきたい。

(委員)

県と市の役割分担の観点から、図書館については、県の図書館と市の図書館の役割が明確になると良いのではないか。例えば、市立図書館は市民向けとする一方、県立図書館は専門性が高いものを揃えるなど、役割分担が必要ではないか。

美術館についても、同様に県立美術館と市立美術館の役割分担も必要だと思う。

(委員)

県の公共施設は、これまで県民を主な利用対象とするものだったが、今後、グローバル化が進む中で、嶺北地方では恐竜博物館や一乗谷朝倉氏遺跡、嶺南地方では年縞などの施設を拡充することで、観光振興や産業化につなげることができるのではないか。

(委員)

若狭三十三観音霊場をバスで巡ったが、大型バスで回ると、小浜市内の道はかなり狭い。また、大型の駐車場もなく、大型バスがUターンすることができなかった。若狭の秘仏など魅力的な場所がたくさんあるが、道路、駐車場が狭い。施設周辺的环境整備が必要である。

(委員)

年配の方などは、駐車場が遠いと不便を感じるので、ぜひ整備してもらいたい。

(委員)

一乗谷朝倉氏遺跡内を周遊の大型バスが走っているが、乗車している観光客は少なくて非常に不経済だと感じた。小型のバスで頻繁に周遊したり、見どころの近くに駐車場を整備すると高齢の観光客や体の不自由な方も助かると思った。

(委員)

観光に関しては、目玉となるものが必要。若狭は食が魅力的であり、6次産業化を観光と結びつけることが重要。

(委員)

先日、若狭に行ったが、嶺北地方からの観光客は、市内の飲食店など詳しい情報は分からず、有名な観光施設で選ばれるを得ない。公共施設を含め集客施設では、目玉となる魅力的な食事があれば良いのだが。

(委員)

「文化施設」については、県の文化施設は個々には頑張っていると思う。県立図書館では、人口当たりの年間貸出冊数が日本一であるし、県立美術館も、全国を巡回し注目を集める企画展などを最近是他館よりも早く開催している。これからも司書や学芸員の能力を十分発揮していただきたい。さらに、文化施設は県内に点在しており、どうやって線で結ぶかの答えを出すのは難しいが、つなげていき文化施設の良さを活かしてほしい。

(委員)

県は権限移譲を行っているが、市町は事務を受け入れる人員を配置しているのか。権限移譲はどのように進めているのか。

福祉分野では、県と市町の事業は互いに関連しており、一方的に県だけ、市町だけが頑張ってもうまくいくものではない。さらに、高齢者などの利用者、地域住民、NPOなどが関わっており、サービスの質の向上の観点からも整理が必要である。

(事務局)

県民にとって身近な母子保健などの業務は市町に移譲し、精神保健や難病などの業務は県が担当している。また、市町への権限移譲については、県内一斉に行うのではなく、受け入れ体制が整った市町から、個別に移譲を行っている。

(委員)

今後、嶺南地方など福井を売り込んでいかなければならないが、福井はPRが今一つとを感じるが、いかがか。

(委員)

興味を持ってもらう宣伝や情報発信が弱い。恐竜博物館は、東京などで積極的にPRを行っている。一乗谷朝倉氏遺跡については、遺跡を見学する観光客は増加しているが、一乗谷朝倉氏遺跡資料館への来館者が少ない。一般の観光客のニーズに合った宣伝や情報発信のやり方が必要。若狭に関しても、若狭の文化は日本のルーツとなり得るエリアであるため、情報発信も興味を引くやり方が必要であると思う。

(委員)

県外や海外からの誘客のためには、目玉を作る必要がある。恐竜博物館は積極的にPRを行っており、そこで培ったPR手法を一乗谷朝倉氏遺跡で活用し、若狭においても

核になる観光地をつくる必要がある。また、福井県の観光施設を評価してもらうためにも、海外に打って出る姿勢が大事である。

(委員)

各施設の入館者数のうち、県内の人がどれくらいいるのかわかると戦略的にも有効。石川県の友人が、よく児童科学館や恐竜博物館などの施設に行くが大変好評である。福井には子供が喜ぶ施設、体験型の施設が多く、とても良い。

(委員)

福井には大規模なシンポジウムや国際会議を開くことができる大型ホテルもなく、レセプションが開きにくい。お金がかかることもあろうが、そうした施設がもっと必要ではないか。

(委員)

今後、国際会議を開催することもあるだろうし、1000人規模の施設が必要ではないか。

(事務局)

大型のコンベンション施設がないと言われているのは事実である。

(委員)

県の業務を一番理解しているのは、業務に直接関わっている県職員。事業の中にはもうそろそろ無くしてもよいと肌で感じている事業などもあることだろうし、廃止可能な事業一覧を作成し、我々委員に提示して検討しても良いのではないか。リスト化してもらおうと、行政改革の観点から検討しやすい。

(事務局)

県では、事業を見直すため、「事務事業カルテ」を毎年作成し、事業の成果等をチェックし、廃止や縮小等スクラップアンドビルドを実施している。今後もしっかりやっていきたい。

(座長)

時間となったので終了したい。県におかれては、本日の意見も踏まえて、新たなプランの検討を進めていただきたい。